

# 悲劇にあらわれた価値の問題

## — エウリピデス『メデシア』研究ノート —

小 林 信 行

(はじめに)

いまではエウリピデス壮年期の傑作とされる『メデシア』も、上演当初はさほどの評価を受けなかったようである。あのアルゴ号の冒険とロマンの結末としては、あまりに救いのない劇であったからなのか。あるいは紀元前431年当時のアテナイ人たちにとっては、異国コルキスからやって来て、オリンポスの神々に先行すると言われる女神ヘカテを尊崇する王女メデシアの姿は、野蛮な未開の国の魔術師として映り、かれらの合理的精神には受け入れ難いものであったためであろうか。あるいはまた、結局この夫婦の破綻劇にはなんの解決策も呈示されてはおらず、妻に悩まされる観客席の夫たちはただ失望するほかになかったからなのか。<sup>1</sup>

だが、劇にまつわるこの種の抵抗感は、おそらく、生彩のない登場人物とされがちなイアソンを通じて感じられるものであり、その意味では当時の観客は、意外にもイアソンの立場に否応なく立たされていたと言えるだろう。しかも、竜車(the Chariot of the Sun)に子供の屍体を乗せてメデシアが飛び去り、彼女の哄笑が聞こえるかのような終幕を迎えていることからすれば、観客の安逸な観劇態度への不敵な挑戦が隠されているとも言えるだろう。

しかし、たしかにアテナイの合理的文明社会は、メデシアという非合理から挑まれ、自らの手中にあるものが彼女の激情に破壊し尽くされてしまうのをイアソンと共に茫然と見送るだけであるが、しかしそこにはメデシアに具現されたものに対する単なる嫌悪感や不快感が残されるのではなく、なにか人間本性についての一つの洞見が与えられる点に、エウリピデスの力量をわれわれは知ることができる。これは『バツカイ』の場合も同様であろう。それは、文明と野蛮、合理と非合理、といった素朴な対立項によってわれわれが何を了解しているかということについての洞見でもあるが、<sup>2</sup>ここではそれを価値の問題と考えたい。この場合の価値とはすなわち、われわれが何を尊重し、何に対して敬意を払っているかという、ギリシャ語ティーメー(time)の問題である。

(劇と登場人物たち)

さて、主人公メデシアが夫の裏切りにあったことから、夫の新しい結婚相手とその父、さらには我が子をも手に掛けてしまうというこの劇は、アリストテレス悲劇論の規格からはかなり外れたものである。Kittoも指摘しているように、そもそもメデシアがアリストテレス理論の主人公からは

ずいぶんと逸脱しているように見えるからである。アリストテレスによれば、悲劇の主人公は神のような存在であってはならず、また劣悪きわまる人間であってもならない。極端な善人や悪人であるよりも、むしろその中間にあってどこかしらわれわれに似た人間であり、その人物がふとした過誤によって破滅していくところに、悲劇特有の恐れや悼ましさも生じてくるとされるのである。だが、一読すれば明らかなように、メデアはおよそそのような規格からは外れた女性である。彼女は、「われわれに似た人間」と見なすにはあまりに過激な性格であり、どちらかといえば犯罪者のとさえも言いうる。もちろん、エウリピデスが彼女をそのような悪人として描きたかったのであれば、彼女の破滅はわれわれになにか教訓を与えていることになっただろう。しかし、なるほど彼女は事態に一つの帰結はもたらしているが、ソポクレス劇の場合のように主人公の破滅に到るというわけではなく、どちらかと言えば破滅的なテーマが描かれているだけであり、しかもそこにわれわれが勧善懲悪的な教訓を得ることはまったくない。

また、悲劇の一つの要素となりうる「過誤」という点ではどうか。メデアが夫の釈明に耳を傾けず、かれの申し出を頑なに拒絶してしまう点(2nd Ep.)、あるいはイアソンがメデアの見せかけの服従を見抜けない点(4th Ep.)などに登場人物たちの落ち度を見出すこともできようが、それらは悲劇的結末にとってどれほど重要な役割を果たしているであろうか。つまり、メデアやイアソンに見られるのは、ある種の愚かさではあっても、過誤と言えないのではないか。また実際、殺害の〈意図〉に過誤を語りうるかどうかといった問題は別にして、メデアは夫の裏切り行為も、自分が殺す相手が誰であるかも十分認識し、殺害も計画通りに実行しており、たとえばオイディプス劇に見られるような過誤を、この劇についてどのように論じるかということには種々の問題がつきまといそうである。

しかし、以上にもかかわらず、これが傑作悲劇の一つであることには間違いなく、アリストテレスの言う恐れや悼ましさといった悲劇の重要な特徴をもっていることも確実に伝わってくる。そこで、ここでは、アリストテレス理論がもっぱらソポクレス劇を念頭においたものではないかといった論議には立ち入らず、むしろ、主人公のメデアをどのようにとらえるかという点が、前述のような合理と非合理といった対立項を生みだしていることに注目しつつ、エウリピデスの描写を通じて価値の問題がどのような形で浮かび上がるかを見ていきたい。

では、メデアはどのように描かれているのか。必ずしも薄情とばかりには見えないイアソンに対する彼女の愛情が、いま現在でどのようなものであるかは詮索しないにしても、子供たちに対する愛情は世間一般の母親のそれとなんら変わりはないように見える。しかし、この劇の主人公の性格的な特徴は、ひとえに侮辱や裏切りに対する感情の激しさにあり、極度の激怒状態を示す点に現れている。アリストテレス的な言い方をすれば、そもそも怒りというものは、自分が正当に評価されず、不当な仕打ちを受けていると感じるときに生ずるものであるが、彼女はその不当な仕打ちに対して過激に反応しているわけである。ここで過激という場合、単に怒りの激しさというだけではなく、彼女に人を許すという寛容の精神がほとんどないことをふくませるべきだろう。子供が可哀想だという気持ちはもちえても、夫に対しては徹底して許しというものを知らない人物のように描

かれており、われわれには周知の家庭崩壊劇的なメロドラマ・ヒロインの枠をはるかに越え出ていることは明らかである。

これに対して、イアソンの方はどうか。夫らしい一応の優しさは示しながらも、そしてそれなりの自己弁護はしながらも、どう見てもメデシアの苦悩を理解しているとは思えず、かつての冒険者がいまやあいまいで凡庸で優柔不断な男に成り果てており、悪しざまに言えば利己的で空疎な人間という印象を免れがたく、とてもメデシアと相克的な立場にある登場人物とは言い難い。また、新しい花嫁の父であるコリント王クレオンにしても、メデシア母子の追放処分を下すものの、それは決して悪意から出たものではなく、ただひたすら娘の幸福を願っている、ほとんど善良な父親として描かれているだけで、これもまたさしたる特徴が付与されているとも思えない。

このように、エウリピデスは、イアソンやクレオンといった男性たちとの対照を際立たせると言うよりも、メデシアにハイライトを当てる描写に力を注いでいるわけである。すなわち、劇全体を通じて怒りをぶちまけ、夫の裏切りに対する復讐の策を練り、子供のことを考えては涙を流す、といったヒロインをひたすら描き尽くそうとしており、したがって当然のように周囲の人物像は自ずと影が薄くなっている。さらには、しばしば指摘されるように、他の作家たちでは重要な役割を果たすはずのコロスの扱ひも随分縮小されたものとなってしまう、やはり悲劇として見た場合、どれほど成功しているかという面では疑問を残し、初演当初の不評もあながちアテナイ人の不明というわけでもなさそうである。

とは言え、規格外の主人公を登場させたことに加えて、劇としてのバランスをも失するという犠牲を払ってまでも、主人公の描写に集中しているところにこそ、この劇の面白さのすべてがある、つまりエウリピデスの力量が如実に示されている、と言っても過言ではない。それほどかれの描写はわれわれを惹きつけるわけであるが、しかし注意しなければならないのは、メデシアがなにか魅力にあふれた存在として描かれているわけでもなければ、あるいは女としての弱い立場を切々と訴ええた存在として描かれているわけでもないし、ましてや子殺しに到るまでの十分な理由が与えられていて、思わずわれわれも同情せざるをえないような筋立てになっているわけでもない。では、いったいこの劇の魅力をどのように語ることができるのか、あるいは、メデシアのような破滅型ヒロインをどのように理解することができるのだろうか。彼女に具現させられた上述のような非合理性とはどのようなことなのか。

### ( 劇 の 解 釈 )

上の問いに対する分かりやすい説明は、この劇を愛欲劇とするものである。劇冒頭での乳母の嘆きは、イアソンが黄金の羊毛をもとめてやってコルキスに来さえしなければ、メデシアが彼に恋い焦がれることはなかっただろうに、というものであり、イアソンの自己弁護の台詞中にも、アルゴ号の冒険を助けてくれたのはメデシアに恋の矢を射掛けたエロースであると言われている(2nd Ep.)。そしメデシア自身も、現在のやっかいな事態が愛によってもたらされたものであると認めている(1st Ep.)。これらから、彼女のイアソンに対する愛欲がこの劇の全体を基本的に動かしてい

ると見ることはほとんど自然な解釈であろう。愛欲というものは、一旦裏切りに合うと、当然のように、悲嘆や憎悪や怒りといったおなじみの感情を噴出させがちであり、この愛憎の感情を過度に抱え込んだ人物としてメデイアは描かれ、その感情(thymos)の過多がこの劇を悲劇的にしていると考えられる。つまり、コロスも嘆くように、メデイアのその感情の激しさは、ほどあいを越えて燃え盛り(2nd St.)、彼女を周囲の人間にとって厄介な存在とするだけでなく、自分にとっても自分のことが苦悩の種になるように描かれている。復讐によって人を傷つけ、その結果自分自身も傷つかざるをえないところまで自らを追いつめており、愛欲に発する感情が制御されることのないままに突き進めば、最終的には人間は破滅に到らざるをえないという図式がこの劇から読みとれることになる。

もちろん、愛欲に発する場合もさることながら、およそ感情の激しさが人間たちを破滅へ導くというだけの劇であれば、今日のわれわれからしてもさほど物珍しいものではなく、とくに夫の裏切りにまつわる愁嘆物語などは、同情を誘いこそすれ、ややもすれば退屈なメロドラマに墮する危険性をまぬがれえない。この劇の強い緊張感は、単にメデイアの感情の激しさや非合理性だけがもたらししていると見るべきではない。むしろ、彼女の激情がわが子の殺害にまでいたるという筋立てこそが、その緊張感を生みす主要因となっているように思われる。これはエウリピデスのオリジナルな工夫であるとも言われているが、たしかにこの殺害の要素がなくなったとき、かれの劇がどのような魅力をもちうるかと想像しても、はかばかしい答えを用意することは難しくなりそうであり、その意味では、筋立ては悲劇の魂、と見なすアリストテレスの主張どおりであろう。

とは言え、子殺しに加えて夫の花嫁の毒殺といったあざとい仕掛けだけに目を奪われてこの劇の魅力を語るとすれば、それはそれでまた見せ物的な要素を売りものにした劇にすぎないという印象を与えてしまうことになる。いまここで大切なことは、この劇を典型的に見ることではなく、エウリピデスの創意と言われるものが劇としてどのように実現されているかという点に注目することであろう。ところで、これについては、間接的な形ではあるが一つの容易な手がかりを得ることができる。すなわち、最初に指摘したように、なにか曖昧な位置づけを与えられているようにも見なされるイアソンの台詞に注目することによって、愛欲に駆られたメデイアが子殺しにまで到った原因を説明しようというものである。

イアソンのことばによれば、「私はおまえをあのだ深い田舎の家からこのギリシアの国へ連れてきた」(Exod.)、だから「おまえはあんな草深い田舎ではなく、このギリシアの地に住んでいる。そして正義の何たるかを知り、また物事を処理するのに力づくではなく、法を用いることを覚えた」(2nd Ep.)はずであるのに、ただ夫を苦しめるためだけに何の咎もない人間たちを殺してしまい、まったく「ギリシアの女には、そんな大それたことをやるような者は、これまでひとりとしていなかった。・・・おまえは獅子だ、人間ではない。」(Exod.)。

すなわち、彼女の子殺しという粗野な非合理性は非ギリシア的なものであると言い立てているわけであるが、これは、メデイアの支離滅裂とも思える言動に付き合わされる観客にとっては、溜飲を下げるとまでは言わないにしても、ほとんど無理なく受け入れることのできる側面をもった申し

立てではなかったかとも思われる。つまり、ここには明らかに男性優位の立場に加えて、対ペルシャ戦争に勝利してギリシャ世界に君臨するアテナイの文化的優越感が意識されているからである。

だがもしそうならば、これはメデシアの性格がもたらした悲劇ではなく、むしろ人間のおかれている文化的・社会的相違は、愛情にとっては大きな制約となり、場合によっては悲惨な結末をもたらすという、やはりなにか教訓的で通俗的な要素の強い悲劇であると見なされ、彼女のしめす激情は、エウリピデスが創作したメデシアという劇的個性を離れて類型化されたものとなる恐れがある。

### ( エウリピデスの工夫 )

ここで、エウリピデスがメデシアを描くにあたって、自分の激情にすぐに翻弄されてしまう一般的な直情型人間としていないことが、この劇に緊張感をもたらすもう一つの要因となっていることに注意しなければならない。その意味では、彼女は必ずしも未開の非合理的人間であるわけではまったくない。彼女は、自分と同じ立場におかれた女性ならば当然口にすべきようなことは十分に承知しており、「子供のために思案を尽くさせて」(1st Ep.)という哀願は、クレオンのこころ(aidos)をも動かし、国外退去命令を出していたにもかかわらず、かれにとってはそれと知りながら致命的な猶予を与えてしまうほどであった。あるいはまた、来客アイゲウスとの会話によってそれとなく事後の手はずをととのえるときの、ある意味では戦慄的な場面も、彼女がけっして直情的で粗野なタイプではないことをしめしている<sup>4</sup>。だが、もちろんそのように策を弄して復讐計画の全体を筋書き立てるところに彼女の伶俐さがあると言うべきであろうが、この賢さは、エウリピデスがメデシアにも自認させているものである。「あまり学問をつけすぎてはなりません、・・・世間から手ひどい反感を買うことになります。・・・このわたくしがそうした目に会っております。なまじ賢い(sophe)ばかりに・・・」(1st Ep.)。

以上のように、エウリピデスは当初からメデシアに理知的側面をはっきりと付与しているとすれば、この劇において仕組まれている理性対感情の葛藤は、「イアソンならびにアテナイ合理主義社会」対「メデシアならびに非合理的未開社会」という図式であるよりも、メデシア自身における内的な葛藤劇であるという解釈を生みそうになる。そして、イアソンとの対立は彼女の内面を劇構成上に反映させた工夫であって、観客もまたその葛藤の中に陥れられて劇的緊張を強いられているのだということになりそうである。

これは、最初に想定したメデシア像とは異なり、要するに彼女もまたわれわれと似た存在であり、われわれと同じような葛藤に陥った人間なのだという見方を採用することになる。もちろん、全面的にそれを否定する必要もないが、しかし、ころろ千々に乱れるメデシアに、上記のような葛藤を感じ取っているのは、本当は誰なのかという疑問が生じる。それは現代の観客ではありえても、エウリピデスもメデシアも当時の観客もそのようなものとは無縁ではなかったかという疑念があるからである。

そもそも葛藤的な事態をわれわれに感知させることは、何よりもエウリピデスが彼女に直情型人間としての性格的な統一性を与えていない、ということの証拠と見るべきであろう。これは、劇そ

のものが「やっかいな事態が述べられ、描写されているだけであって、いかなる解決をも与えていない」(D.L.Page) ことと歩調を同じくしている。しかし、たしかにこの劇はメディアの独壇場という印象が強く、上記のような彼女の内的葛藤が劇の中核をなしているとする解釈はきわめて自然であるが、たとえ貧弱な印象を与えるにせよ、やはりイアソンやクレオンの配置にはエウリピデスの劇に関する構造的な配慮が働いており、いたずらに軽視することはできない。

また他方、エウリピデスの劇が、のちのプラトンに魂の部分説といった心理的葛藤にかかわる問題意識を準備していると主張することは十分に許されるだろう。ただし、この主張は二義的である。すなわち一つには、理性的なものとそれに対立する要素といった考え方はまだこの劇の上演当時の人たちには馴染みがなく、前掲のように文化社会の特質としては「正義、法」といった概念が提出されているだけだという意味である。しかしだからと言って、劇中の心理描写はプラトン以前の未だ拙い分析であると理解すべきではないという意味もある。実際、そこに心理学的材料の素朴な提示を見るだけならば、劇のもつ文学的生命は見落とされたままになるし、たとえ哲学的な形ではないにせよ、われわれはエウリピデスの一つの間人洞察を見逃すべきではないからである。

以上のような確定しがたい点に留意しながら、この劇の中に感知される葛藤や対立の事態がいかなるものであるかを見てみたい。

#### ( エウリピデスのしめす価値と反価値 )

さて、前述のように、表面的には我が子を殺すほどの非理性・激情に支配されているかのように描かれてはいるが、メディアにはなにか奇妙な形で理性的なものが温存されていた。そして、そのことがわれわれをして葛藤ということばを適用させてしまうこと、さらには「理性的には否定されるべきことが、感情の制御がなされなかったために、悲惨な結末に到り着いてしまった」あるいは「人間はある状況においては感情によって十分に動かされるものであり、とくに恋情という激しい感情の前には、理性と言えども根本的には無力である」といった感想を抱きがちであること、が示唆された。そこで最初に提起したように、上のような感想においてわれわれが了解している事態を価値という観点から明らかにしておきたい。

ところで、上記のような葛藤はイアソンを通じて現代的な観客が抱くものではないか、という疑念もすでに指摘した。一般的な葛藤の実態は、相反するものが等価的に存在している状態において生じていると考えてよいだろう。だが実際のところ、アテナイ合理主義社会の代弁者と見なしうるイアソンも、そして今日のわれわれも、理性と感情を等価的なものとは考えていないのではないか。むしろ、理性や法には従うべきものであるという前提が強く働いているのではないか。少なくともイアソンはそうであるように思われる。<sup>45</sup>あるいはたとえ「強く」ではないにしても、そのような対立項の成立そのものが、法という形をとる理性に、感情以上の価値を認めているのではないだろうか。それを哲学史上初めて明確に提示したのはプラトンである。かれは『国家』において、ここまで感情とか激情ということばで漠然と語られてきたものの中核に〈欲望的なもの〉を見出し、それに対立するものとして〈理性的なもの〉を位置づけたが、単に対立関係を立てたということだけでは

なく、後者が人間の魂の全体を導く原理となるべきであるという認識をも示したのである。

だが、なぜかれは理性に主導権を与えうるのか。それは、理性が欲求的なものに対立しようという、きわめて単純だが重要な点にあると思われる。というのも、欲求や欲望はいわば自らを主張するだけにすぎないことを特徴とするのに対して、理性は反対するにもその理由をもつのであるが、理由が与えられるとき、理性のもたらず反対、抑制、禁止といった心的はたらきは、自己主張するだけの欲求や欲望の閉塞性を打破するからであり、われわれはそのような閉塞性からの解放に人間的な価値を見出そうとしているからではないだろうか。それはまた、理性がわれわれの中でどのように位置づけられているかという点に、人格的な統一性の起源を見ようという立場でもある。

メデシアの存在とはまさにそのような価値観へのアンチテーゼに思われる。ただし、それは単に彼女が激情に支配されてしまうからではない。たしかに彼女は理性や分別に敵対しているように見えるが、非合理主義あるいは感情至上主義を唱えているわけではないし、エウリピデスもまたそのように描いてはいない。そうではなくて、たとえ自分の中で理性や分別がはたらいていても、それが感情に優先するものであるという価値観を彼女は持ち合わせていないと見るべきではないか。そして、そのような彼女の中にわれわれが見がちな野蛮さあるいは粗野といったものの内実は、性格的なあるいは人格的な統一性の欠落であろう。われわれにとって理性は、そのもとに自分の行為が采配される、信頼すべき最終的な要素でありうるが、つまりそれがわれわれの価値観であるが、メデシアにとってはそうではない。「さあ、やれ、メデシアよ、知能のかぎりを尽くせ、よく考え、謀をめぐらすのだ、凶事に向かってすすめ」(1st Ep.)と自らを叱咤するときでさえ、彼女は、そのもとに自分の行為が統括されるようなものにも、そしてそれによって実現されるであろうような内的な秩序にも、まったく無頓着なのではないか。われわれならば理性を尊重するが故に「欲望や感情に打ち負かされた」と言うような場合にあって、彼女にはそのような言い訳はない。おそらく彼女はただ自分の存在を否定する者に対してはたらく強い要素(とくに怒り orge)に従っているだけで、けっして何かに「打ち負かされている」わけではないのである。すなわち、それが理性を自らの内的な秩序の原理としていない<sup>46</sup>ということの当然の帰結であろう。

イアソンはそのようなメデシアに対決させられている。そして子殺しにいたっては、かれにはメデシアがほとんど狂気と映ったにちがいない(cf. 5th St.)。だが忘れてはならないのは、「劇の中程でわれわれはほとんどメデシアの側についてしまっており、それと知らずに彼女の激情につきあってしまった結果、劇の到りつく結末も相応のものとして受け入れてしまう」(Page)という点である。これこそエウリピデスの筆力であると言うことはできるが、同時に、われわれはかれの突きつける反価値をどこかで受け入れさせられてもいるのではないか。それは、安易で軽薄な合理主義への戒めとしてであるかも知れないし、場合によっては作品のもつ文学的な瞞着に逢ってしまったためであるかも知れない。ともあれ、文学は哲学が輝かしく彫琢してゆく場面に素材を提供しながらも、他方でつねに素材のもちうる自足性も主張している。

( 註 )

- \*1 もちろんエウリピデスが女の観客など想定していないことは言うまでもないが、メディアを魔術師と見るのかそれとも女と見るのか、あるいは女とは魔女のような存在であるという寓意と見るのか、その立場はいくつか考えられるが、いずれにしても、男性観客の目に映るメディア像と、そのような制約を離れた目に映るメディア像を区別する必要は、議論上は、あるかも知れない。しかし、時間空間的に制約される見方とそれを越える見方が巧妙に入り混じって現前してしまうところにすぐれた文学の特質もあるという点は忘れるべきではないだろう。
- \*2 ちなみに、およそ2400年後のイタリアの映画監督ピエル・パオロ・パゾリーニもまた、この劇を文明的なものと未開なものとの対立によってもたらされた悲劇として描いた(「女王メディア」1970)。ただしかれにとって、それはマルキシズム的対立図式の比喩ではあったが。
- \*3 「たしかにわたくし、何かにつけ、たいていの方とは変わっております」(2nd Ep.)  
邦訳並びに Stasimon, Epeisodion 等の構成は下記に負っている。  
ギリシア悲劇全集5 (丹下和彦訳、岩波書店 1990)
- \*4 アイゲウスは「あなたは先の先までしっかり読み通しておられる (pollen edeixas en logois promethian)」と評している。(3rd Ep.)
- \*5 「正義や法が通用する世界での評判 (doxa) の尊重」と言う方が正確だろう。
- \*6 「メディアにおいては情熱は知性を曇らすどころか、かえってそれを明晰にするのである」という興味深い分析もある。(ボナール「ギリシア文明史」岡道男他訳)

[ 参 考 文 献 ]

- D.L.Page, Euripides Medea 1938  
H.G.F.Kitto, Greek Tragedy 1961  
A.Elliot, Euripides Medea 1969  
D. J. Mastronarde, Euripides Medea 2002